

【実践報告】

教育実習V・VI（中・高）の報告

広島文教大学教育学部教育学科

准教授 猪川 優子

教授 笹原 豊造

教授 黒木 晶子

1 はじめに

教育実習V・VIは中学校・高等学校教員としての適性を確認し、その資質を伸長するために行われるものである。大学で学んだ理論と教育現場での実践がどのように関連するかを実習で学ぶ。実習校で指導担当教諭の指導のもと、授業参観、教材研究、授業実施、学級指導等を行う。

2 実施のスケジュール

項目	時期	主な内容
事前学修 (学内)	4月～5月	・本実習の意義、目的、心構え等を再確認する。 ・実習校への事前訪問により、指導担当教諭等の指導担当者に、担当となる学級の生徒の実態や、指導計画、担当授業の内容を確認する。 ・教材研究、模擬授業を行う。担当教員による指導、実習生相互の検討作業を通して、よりよい教材・授業になるよう工夫を重ねる。
本実習 15日間 (学外)	5月～6月 (今年度は 9月～10月 にも実施)	・実習の内容は実習校により計画される。主な内容として、①指導担当教諭等からのオリエンテーション、②授業参観、③教材研究、④授業担当、⑤生徒指導、⑥その他の学校・学級運営に関わる諸業務が挙げられる。 ・実習中は教育実習日誌等の記録をつけ、中学校・高等学校教員の役割・業務等について理解を深める。
事後学修 (学内)	7月 (今年度は 9月に実施)	・各自の実習を振り返り、報告書をまとめる。 ・各自の実習内容について報告会で報告する。報告会では、教科指導、生徒指導、校務等を通して学んだことを発表する。

3 活動の概要

○教育実習を通して学んだこと（学生の報告会資料より抜粋）

・大学での講義では納得のいった理論がいざ現場に出ると実践に結び付けられなかったり、先生方の行動から目的に気付くことになったりする場面が多く、学んだことが身体にしみ込んでいないことを痛感した。一方で、小学校実習で課題が残ったメリハリのある授業展開について改善に努めたり、授業参観後に質問をして先生方の工夫を聴いたりと積極的に実習に臨むことができた。今後は、教育実習で明らかになった自分の未熟な点を克服することに努めていく。大きくは2点あり、教材研究を深めることと知識や経験を増やすことである。わかりやすい授業の中には、誤答を生かす発問や発表方法の工夫があった。このことによって、生徒が自己存在感や有用感を感

じている様子を見ることができたことは大きな学びであった。あらゆる分野について学び続けて知識や経験を増やし、教材研究と組み合わせる楽しい授業を展開できる力を身に付けていきたい。

- ・実習校の先生方や生徒の温かさに助けられて、最後まで楽しく実習をすることができた。先生方は、出会ったときに声をかけてくださり、質問をすると丁寧に助言をしてくださった。生徒は、私が中学生に対して持っていたイメージとは違い、積極的に声をかけたり、話をしたりしてくれた。このように、生徒が伸び伸びとしているのは、日頃から先生方が生徒に寄り添って信頼関係を築いているからなのだと分かった。中学校の授業は、より専門的であるため内容も難しかった。しかし、一つの教科に集中して取り組めるため、授業の質を向上させることができると分かった。GIGAスクール構想により、生徒一人一人にiPadを貸し出す環境が整っていた。授業や夕学習などでiPadを使用していたことが印象的だった。実習を終えて、教員になりたいという気持ちがさらに高まった。今回の実習で学んだことを生かしてこれからも成長していきたい。
- ・多忙な中、生徒のために良い授業を行おうと努力しておられる先生方の姿勢に感銘を受けた。また、先生方がその科目の専門家であることの誇りを持っていることを感じた。今後は、目の前の生徒たちを想定し、より綿密な教材研究を行っていきたい。また、生徒理解を行い、信頼関係を築くことが必要だと学んだ。さらに、「全てはコミュニケーションである」と担当の先生に講話していただいたことが印象に残っている。教師や保護者、地域の方々など、生徒に関わっている全ての人と良好な関係を築くことも教師の仕事の一つなのだと学んだ。日常生活を通して、楽しみながら多くの人とのコミュニケーションを重ねていきたい。

4 成果と課題

本年度の実習は、昨年度に引き続きコロナ禍の厳しい状況の中で実施された。教育実習Ⅴ・Ⅵは、2～3年次の教育法の授業や観察実習（教育実習Ⅳ）等の延長にあって、教員免許取得に向けた集大成の意味を持つ本実習である。様々な制約の中で、決して十分な準備を整える余裕はなかったと思われるが、実習生たちは自分たちができうることを試行錯誤しながら精一杯取り組み、それぞれの実習校で多くの学びを得た。

中・高等学校における教育実習では、全科を扱う小学校と異なり、専門の教科に特化して学習指導を行う。実習生たちは、教材研究の難しさと重要性を実感しながら、より良い授業づくりを模索していった。授業や学校全体の様子をよく観察し、生徒たちや先生方とコミュニケーションを図り、自らの授業に対する助言や指導を真摯に受け止め、実際に教壇に立つ中で、授業をする怖さや楽しさや奥深さを知っていったと感じられた。

実習報告会は、実習時期の関係から9月（前期）と12月（後期）に実施された。多くの実習生が発表した前期の報告会では、会場をオンラインで中継し、実習生同士の意見交換や情報共有、2～3年生との質疑応答が活発に行われた。

次年度は、中等教育専攻（国語教育コース・英語教育コース）の1期生たちがいよいよ本実習を迎える。実習に向けてどのようなことに取り組めば良いのか、大学での学修をどう生かすか、1期生ならではの不安を抱えながら臨むことになる。実習報告会の形式も、従来の形式にとらわれず、実習生たちを主体として構成し、実施していきたいと考える。